障害者らにリラクセーション効果

スヌーズレン用品開発

山口の三笠産業、展示館オープン

自社開発の蛍光トナーで

印刷用トナー製造などを手掛ける山口市小郡山手上町の三笠産業（佐伯誠社長）が、発達障害や認知症の人のリラクセーションなどに効果がある「スヌーズレン用品」を開発し、商品を展示する「きらめきの三笠館」を同市小郡下郷の同社敷地内にオープンした。同社が開発したブラックライトで光る蛍光トナーなどを利用したもので、スヌーズレン用品を集めた展示室は全国初という。

ブラックライトで光る蛍光トナーで印刷したすごろくを手にする三笠産業の佐伯誠社長＝20日、山口市

同社は、農薬製造で培った粉砕技術を使って約30年前にトナー製造を開始。独自性のある製品をと、2014年に蛍光トナーと暗闇で1時間程度光り続ける蓄光トナーを開発した。

活用方法を探る中でスヌーズレンを知り、やまぐち産業振興財団の助成金を活用して商品化。ISNA日本スヌーズレン総合研究所所長を務める常葉大学の姉崎弘教授らの指導で研究開発を進めた。

姉崎教授によると、スヌーズレンは「五感を刺激する空間と時間を提供する安らぎの活動」。リラクセーションと活性化の両面の効果が知られ、リラックスを図るレジャーや発達を支援する教育、セラピーに活用でき、多くの論文で効果が報告されているという。

きらめきの三笠館は、同社物流センター内のケーキ店だった建物を改装。蛍光トナーなどで印刷した紙芝居やパズル、すごろくなど約50点を展示している。光るクレヨンや学習用のひらがなカードもある。

同社製品は、紙製のため安価で、電気を使わず安全性が高いことが特徴。姉崎教授は「壁面や床面を広くさまざまな色で光らせることができ画期的」と評価し、弱視や重度の障害がある子ども、認知症患者らの有効な教育・支援方法の一つとして、今後の成果に期待を込める。

佐伯社長は「子どもたちがパズルに集中したり光る紙で遊んだりと、何らかの新しい刺激になっているのでは。総合支援学校や障害者施設などで活用してもらい、役に立てれば」と話した。来月26日には東京で開かれる同研究所の研修会で同社の取り組みを紹介するという。

開館時間は午前10時～午後6時。日曜、祝日は休館、土曜不定休。来館は事前の予約を呼び掛けている。問い合わせは同社（電話083・974・6331）へ。